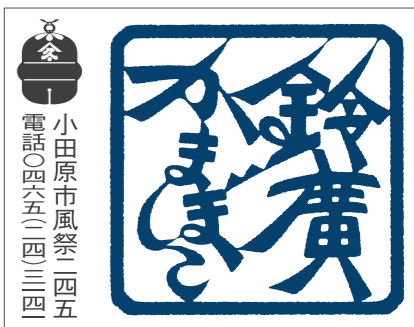


# 令和二年 大相撲七月場所

## ◆大相撲よもやま話◆ 三賞あれこれ

本場所を盛り上げた力士に贈られる「三賞」の受賞者は、毎場所千秋楽に三賞選考委員会が開かれて決定する。受賞資格があるのは勝ち越した関脇以下の幕内力士で、「殊勲賞」は横綱・大関を倒すか幕内最高優勝に関係ある成績をあげた者、「敢闘賞」は敢闘精神旺盛な者、「技能賞」は技能が特に優秀な者に与えられる。

三賞制度が始まったのは、太平洋戦争が終わって二年後の昭和二十二年十二月場所。焼け跡からの復興の途上にあった大相撲を盛り上げるためのアイデアだった。以来、七十年以上の間に、さまざまな力士たちが三賞の歴史を彩ってきた。

「涙の敢闘賞」として知られるのが大関名寄岩だ。天真爛漫な性格に闘志満々の土俵で「怒り金時」と人気を集めたが、ケガのため大関から二度陥落。十四枚目まで番附を下げて迎えた昭和二十五年五月場所、満身創痍の体に鞭打って土俵に上がり、九勝六敗と勝ち越して敢闘賞に輝き、「涙の敢闘賞」と話題になった。四十歳で引退した後、その劇的な土俵人生をもとにした映画が本人出演で作られている。

それから七十年後、再び「涙の敢闘賞」と話題になったのが安美錦(現安治川親方)だ。女人好みの相撲の人氣力士が、三十八歳にしてアキレス腱を断裂し十両陥落。

しかし、引退の危機を乗り越え、四十歳で再入幕を果たした平成二十九年十二月場所、千秋楽に八勝目を挙げて勝ち越しと敢闘賞受賞を決めて流した涙が、ファンの感動を呼んだ。

昭和四十八年には「三賞独占」が二場所連続で実現した。七月場所、大関取りで臨んだ東関脇大受が、得意の押しが冴え、横綱北の富士と大麒麟、貴ノ花の両大関を倒して十三勝を挙げ、史上初めて殊勲賞、敢闘賞、技能賞の三賞独占の快挙を達成。翌場所は大関に昇進した。続く九月場所は、新入幕の西前頭十三枚目大錦が大活躍し、終盤には抜擢されて上位との対戦が実現。十三日目には大関貴ノ花、十四日目には横綱琴櫻を撃破し、十二勝四敗で三賞独占を果たして、翌場所は一気に小結に昇進した。その後、「三賞総嘗め」は平成四年一月場所の貴花田(のち横綱貴乃花)、十一年七月場所の出島(のち大関)、十二年十一月場所の琴光喜(のち大関)の三例が出ているが、いずれも他にも受賞者がおり、「三賞独占」は半世紀近く生まれていない。

表1、表2は、三賞受賞回数が多い力士十傑を、歴代と現役力士それぞれまとめたものだ。現役力士で最多受賞の栃ノ心は、ヒザのケガで幕下に落ちながら不屈の闘志で復活したこともあって敢闘賞が多い。二位タイの鶴竜はモロ差し、九位タイの妙義龍は押しが評価されて技能賞が多く、四位タイの御嶽海は大物食いらしく殊勲賞が多い。二位タイの高安はすべての賞をまんべんなく受賞し、バランスが良い。三賞は、力士の個性も浮き彫りにするのだ。

表1…三賞受賞回数10傑(歴代)

順位	10	7	4	3	2	1
四股名	安美錦	栃東(大関)	琴光喜	土佐ノ海	武双山	貴闘力
計	12	12	13	13	13	14
殊勲	4	3	2	7	5	3
敢闘	2	2	4	5	4	10
技能	6	7	7	1	4	1

表2…三賞受賞回数10傑(現役力士)

順位	9	7	5	4	2	1
四股名	遠藤	隠岐の海	妙義龍	朝乃山	栃煌山	貴景勝
計	5	5	5	6	6	7
殊勲	1	1	2	2	3	3
敢闘	1	4	3	2	2	1
技能	3	5	1	2	2	4



YouTube  
日本相撲協会公式チャンネル  
「親方ちゃんねる生解説」



フォトレコ 相撲



すもろストア  
日本相撲協会公式  
ONLINE SHOP






◆七月場所の優勝力士◆◆

# 「南海の黒豹」、圧巻の全勝優勝

## 昭和五十九年七月場所優勝

### 若嶋津

(東張出大関 十五戦全勝)



浅黒い肌に引き締まった体、精悍な表情から、「南海の黒豹」と称された若嶋津(現二所ノ関親方)は、昭和五十年代後半の土俵を彩った名大関だ。

鹿児島県種子島出身で、鹿児島商工高校(現樟南高校)相撲部で活躍。高校卒業を機に元横綱初代若乃花の二子山部屋に入門し、昭和五十年三月場所、初土俵を踏んだ。同期生には大関霧島や、同じ二子山部屋の関脇太寿山らがいる。この場所、初優勝を遂げたのが、二子山部屋の兄弟子である貴ノ花。稀代の人気大関が日本中を熱狂させながら勝ち進み、横綱北の湖を決定戦で破って優勝した姿は、若き若嶋津の脳裏に鮮烈な印象として刻まれ、憧れの存在として目標に掲げ、猛稽古に励んだ。

昭和五十六年一月場所所で新入幕を果たすと、この場所限りで引退した貴ノ花と入れ替わるように幕内上位に進出。左下手を取り、右からおつつけて出る寄り身の鋭さに加え、不利な体勢でもしぶとく残る粘り強い取り口が身上。貴ノ花から受け継いだ真つ向勝負の姿勢や、真摯に土俵に打ち込む態度がファンの心を揺さぶり、たちまち花形力士となった。五十七年十一月場所後に大関に昇進すると、休場した二場所を除きすべて白星が二ケタ以上という安定した成績を続け、五十九年三月場所には十四勝一敗で初優勝。五月場所は九勝六敗で綱取りは振り出しに戻ったものの、心機一転して臨んだ七月場所が、ファンにとって忘れえない場所となった。

この場所は、北の湖、隆の里、千代の富士の三横綱と、北天佑、朝潮、若嶋津、琴風の四大関のうち、若嶋津が苦手にしていた千代の富士が初日から休場。そんななか、場所前から稽古十分の若嶋津は、初日から破竹の勢いで勝ち進む。初日は西前頭筆頭栃司、二日目は西小結蔵間、三日目は西前頭四枚目栃剣をいずれも寄り切り、四日目には前場所不覚を取っている東前頭筆頭大乃国(のち横綱)を小手投げで退け、五日目にはやはり前場所敗れている西前頭三枚目保志(のち横綱北勝海)を豪快な左下手投げで裏返しにして蹴。六日目には東小結巨砲を上手投げで退け、全勝で並んでいた北の湖が敗れたため、単独首位に立った。

七日目には、前日北の湖を破っている西前頭二枚目旭富士(のち横綱)を吊り出し、八日目には東前頭六

枚目出羽の花を寄り切って全勝ターン。一敗の北の湖と琴風が敗れたため、早くも後続に二差をつける独走態勢に入る。九日目は東前頭五枚目麒麟児を押し倒し、十日目は西関脇逆鉾を寄り倒し、全勝のまま終盤、横綱・大関陣との対戦に突入。十二日目には西大関朝潮を寄り切り、十三日目には東大関北天佑を下

手投げで下して十二連勝とし、十三日目、二敗の北の湖と、勝てば優勝決定という二戦に望んだ。

北の湖にはここまで七勝六敗と対戦成績でリードしている若嶋津は、左四つで北の湖に先に両廻しを許し、寄られて後退したが、右からおつつけながら左に振って体を入れ替え、右上手をつかむと、そのまま上手投げで這わせ、二場所ぶり二度目の優勝を決めた。その後も気を緩めることなく、十四日目にはこの場所新入幕で敢闘賞受賞の西前頭十二枚目霧島を送り出し、千秋楽は西張出大関琴風と対戦。左四つがつぶりの力相撲の末、右上手投げで崩して出て寄り切り、ついに初の全勝優勝を成し遂げた。

この場所の若嶋津は、立ち合いの踏み込みは鋭く、下半身も安定し、投げの切れ味も抜群。全勝という星数以上に、充実して隙がない、圧巻の相撲内容だった。翌九月場所は、終盤まで優勝を争ったが多賀竜が十三勝二敗で平幕優勝し、若嶋津自身は十二勝四敗となり、綱取りは成らず。その後は病気やケガに悩まされて昭和六十二年七月場所限りで引退し、十二年間の土俵人生に幕を下ろした。しかし、真夏の名古屋で、まさしく獲物を狙う黒豹のように躍動した姿は、ファンの脳裏に永遠に刻まれている。



同じ二子山部屋の同期生太寿山を旗手に従えての優勝パレード

# 番附表

◆大相撲「モノ」語り◆◆

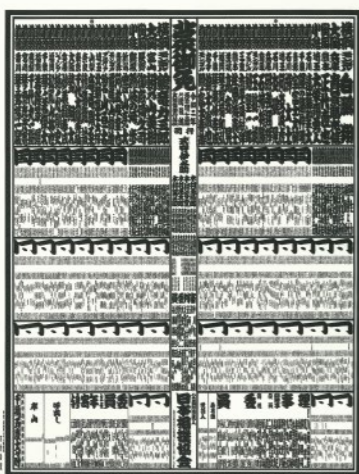
毎場所、初日の十三日前に発表され、本場所の到来が近いことを知らせてくれる番附表。そこには、力士の最新ランキング(番附)を効率よく、江戸情緒もこめて伝えるための、さまざまな工夫が施されている。

千客万来を願って肉太の書体で記される相撲字は、江戸情緒に溢れ、見る者を相撲の世界へと誘う。担当の行司によって縦百十センチ、横八十センチのケント紙の「元書」が書かれ、約四分の二の縦五十八センチ、横四十四センチに縮小されて印刷される。

中央に大書された「蒙御免(ごめんこうむる)」は、江戸

時代、幕府から開催の許可を得ていることを示す名残だ。

力士の四股名は、右は東方、左は西方と分けられ、上にいくほど文字は大きく、太くなる。特に、十枚目以上とそれ以下の太さの違いは歴然で、十枚目以上の力士こそが一人前と認められることを、言葉で説明するより雄弁に物語る。力士だけでなく、中央の下には行司や審判委員、左右の最下段には審判委員以外の年寄や若者頭、世話人、十両以上の呼出し、等以上の床山の名が記されている。力士に限らず現在の相撲界の全容がこの一枚に凝縮されているのだ。



令和二年五月場所の番附表。中止になったため、七月場所では新番附の製作は行われず、この番附が使われる

